

# タクシスに基づくシタ－シテイタの 文法説明について

清 水 淳

## On the Grammar Explanation of “shita” — “shiteita” from the Point of View of Taxis

Jun Shimizu

### Abstract

The present article, on the basis of the discussion by Kudou (1995), Hata (2002), and Shimizu (2017), considers how to apply ‘taxis’ (the concept of temporal order among the plural events) to the grammar explanations of “shita” and “shiteita”. I claim that it is valid from the point of view of Japanese pedagogical grammar to simplify some functions of taxis to two functions: ‘sequence’ and ‘simultaneity’. And then, as points that should be brought to attention when applying the taxis simplified, I consider the context in which it is not necessary to express the temporal order, the context in which the past habitual acts are expressed, and the conversational context.

### 1. はじめに

文法項目の中でシテイル（シテイタ）は使用頻度の高い文法形式であり、日本語教育の現場においては習得に向けた効果的な指導が期待されている。しかしながら、先行研究においては、シテイルの習得の困難性が示され、教育現場での文法説明の不足が指摘<sup>1)</sup>されている。このような状況に対し、畠（2002）は、シテイルが〔進行〕と〔結果状態〕を表す一つの文型であるという文法説明を批判的にとらえ、シテイルを独占的に〈現在〉を表す

テンス形式として指導するべきだと主張している。同時に、シテイルを〈現在〉のテンス形式とするならば、並行的にシテイタを〈過去〉のテンス形式とし、シタとシテイタの2種を〈過去〉のテンス形式とすることも提案している。ただし、そこではシタとシテイタの使い分けについて明確な区別はしていない。清水（2017）はその区別について、アスペクトの意味に基づく説明ではなく、タクシス（時間的順序性）に基づく説明の可能性を示唆している。つまり、シテイルは、接続する動詞のタイプによって〔進行〕か〔結果状態〕の意味になり、シテイタはその〈過去〉であるという従来型の説明ではなく、シテイルは発話時と同時（つまり〈現在〉）を表し、シテイタは〈過去〉のある出来事と同時を表すという説明である。これは、習得が難しいとされるシテイル（シテイタ）について、従来のアスペクトの意味の説明ではなく、テキスト（文章や談話における文脈）におけるタクシスの機能の説明を提案したものである。ただし、そこでは提案にとどまり、実際の教育現場に応用する際に留意すべき点についての考察はなかった。

本稿は、このタクシスの機能の説明を日本語教育におけるシターシテイタの提出においてどう扱うべきかを検討することを目的とする。まず、畠（*ibid.*）の述べるテンス体系について確認する。そして、工藤（1995）を中心にタクシスの詳細を見る。次に、初級日本語教育における文法指導の立場から、タクシスの概念をより単純化した方法で文法指導に役立てるべきであることを主張し、その際の留意点として、まとまった文脈を想定しない単独的な事柄、複数の事柄であっても時間的順序を意識しない単純列挙の用法、〔反復性〕の捉え方、会話の指導として個別的な扱いが必要なシテイタの用法について考察を加える。

なお、本稿では、アスペクトの意味は〔 〕、テンスの意味は〈 〉、タクシスの機能は《 》で示す。また、用例については、特に断りがない場合は筆者の作例である。その他、事例については、以下のリソースから抽出したものである。

- ・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』：中納言により検索。以下、『BC-CWJ』とする。
- ・『日中 Skype 会話コーパス』：pair ○ - ○ - ○ は会話データの ID を示す。C は中国語母語話者、J は日本語母語話者を表す。● は文字化の際に聞き取れなかった箇所を示す。以下、『日中』とする。
- ・『日本語教育教材（母語）シリーズ 2 外国人の日本語作文に見られる誤用例集』：以下、『誤用例集』とする。

## 2. テンス体系について<sup>2)</sup>

ここでは、畠 (*ibid.*) において提案された日本語の基本的なテンス体系を見る。畠 (*ibid.*) は、シテイルが定着しにくい文型であるという観察から、シテイルは、動詞のテ形に接続して〔進行〕または〔結果状態〕を表す一つの文型であるという教え方ではなく、独占的に〈現在〉を表すテンス形式であるという教え方を採るべきだと主張し、以下の表を示している。

表 1

3)

	変化動詞	状態動詞
超 時 態	スル	スル
未 来	スル	スル
現 在	シテイル	スル
過 去	シタ シテイタ	シタ

(畠 *ibid.*: 56)

畠 (*ibid.*) は、表 1 のように、シテイルを〈現在〉を表すテンス形ととらえる。そして、それと並行的にシテイタも〈過去〉を表すテンス形式の一つと考え、変化動詞における〈過去〉の形式をシタとシテイタの 2 形式としている。〈未来〉については、スルのみとしている。

シタとシテイタの使い分けに関して、畠 (*ibid.*: 16 章) は、「シタとシテイタの対立ではシテイタの表す状態の性質が問題になる」とし、①持続態が進行を表す動詞、②結果を表す動詞の場合、③単なる状態を表す動詞に

分けて考えて考察したが、結論としては、これらの違いを厳密に考える必要はなく、シタは動きを、シテイタは状態を表すと説明すれば十分であると述べている。ただ、シテイルに関してはアスペクト的意味の説明を避けて、〈現在〉というテンス的意味の説明を採るべきだとし、一方で、シテイタに関しては動きか状態かというアスペクト的意味の説明を提案していることについては違和感を覚える。結局のところ、従来のアスペクト的意味の説明に逆戻りしているように感じられる。これについて清水 (*ibid.*: 50-51) は、〈現在〉とは異なり、〈過去〉〈未来〉は、実際に観察可能な事柄を述べるのではなく、すでに終了した事柄またはこれから起こる事柄を思考の中で処理をして言語化するため、動きか状態かという区別は学習者には理解されにくいと述べ、タクシスを軸とした文法説明の可能性を示唆している。

そこで、次章では、主に工藤 (*ibid.*) を参考に、タクシスについて概観する。

### 3. タクシスとは

タクシスを考える上で、寺村 (1984: 144-145) の学習者の作文の例とその考察は有効である。

(…) その夜、山ノ上旅館で泊まっていた。翌日の朝、早く起きて、山にのぼった。寺村 (*ibid.*: 144)

寺村 (*ibid.*: 144-145) は下線部の誤用について、「宿泊にかかる7、8時間」という時間的な長短を考慮に入れてシタとシテイタを使い分けたことに誤用の原因があるとしている。そして、例は、出来事の時間的連鎖なのであるから「泊まった」が普通であるとし、「泊まっていた」とすると、読者の注意は、「そのあいだに何が起こったのか」という方向に向くため、次のようにしたほうが、自然に受け入れられると述べている。

山ノ上旅館に泊まっていた。夜中に地震があつて、皆飛び起きた。

工藤 (*ibid.*: 63) は、上記の寺村の例をシタとシテイタのAspect対立の本質を示す好例であるとし、次のように述べている。

スルを使うのは、〈出来事の連鎖〉をのべるときである。通時的 perspective において、出来事の継起 (sequence) をのべるとき、時間の流れの中に次々と起こってくる出来事の連鎖のなかに、1つの出来事を配置するときは、スルであつてシテイルをつかうことはできない。一方、シテイルは、この時間の流れをとめて、共時的 perspective において、出来事間の共存 = 同時性をのべるときつかわれる。

つまり、タクシスとは、複数の事柄間の「時間的順序性」(工藤 *ibid.*) である。そして、《継起》と《同時》という時間関係がタクシスの最も基本的な構造である。工藤 (*ibid.*: 161) は、Aspect・テンス体系とタクシスの関係性について、表2のようにまとめている。

表2 〈Aspect・テンス体系〉

時間的限定性・ムード Aspect テンス	具体的・アクチュアル			抽象的・ポテンシャル
	完成性	継続性	パーフェクト性	反復性
未来	スル	シテイル	シテイル	(/) スル
現在	/	シテイル	シテイル シタ	シテイル スル
過去	シタ	シテイタ	シテイタ	シテイタ シタ
	↓	↓	↓	↓
	継起性	同時性	後退性	背景的同時性 (説明)

〈テキストの機能 = タクシス〉

表2の下部に見るように、タクシスは4種に分けられる。〈過去〉について、以下のそれぞれの例を挙げる。

(1) 今朝は6時半に起きた。そして、7時に家を出た。 《継起性》

(2) 昨夜は10時ごろ家に帰った。その時、子供は寝ていた。

《同時性》

(3) 昨夜は10時ごろ家に帰った。部屋が暖かかった。実は、外出の前に暖房をつけていたのだ。 《後退性》

(4) 昨夜は早く家に帰った。妻にびっくりされた。いつも残業で遅く家に帰っていたからだ。 《背景的同時性》

(1) は、「起床」と「出発」が順番に起こったことを表す。(2) は、「帰宅」と「子供の就寝」が順番に起こったのではなく、「帰宅」という出来事と「就寝中」という状態が同時にあったことを表す。(3) は、「帰宅」時点よりも前に「暖房をつけた」ことを表す。ただし、それは、「文脈的に設定されている時点」(帰宅時)と「関係づけられていて、その設定時点とかかわりのある先行運動を表す」(工藤 *ibid.*: 112)。(4) は、「早い帰宅」という出来事と「最近の遅い帰宅」という〔反復性〕のある状況が同時にあったことを表し、「出来事に対する《背景的説明性》」(工藤 *ibid.*: 112)となっている。

#### 4. 初級におけるタクシスの単純解釈

教育に寄与する文法を考える場合、厳密性をどの程度まで捨象し、ルールを単純化すべきかを考える必要がある。初級の文法教育においてはなおさらである。本稿では、表3で示された4つのタクシスの意味の違いをすべて厳密に教えるのではなく、大きく2つに分けて教えることを提案する。

4つのタクシスは、まずは大きく《継起性》とそうではないもの、つまり、《非継起性》とに分けられる。教育文法の観点からは、テキストの構造として、事柄を生起した順番に述べていく構造《継起性》と、その他《非継起性》が存在し、前者はシタ、後者はシテイタで表すという大別をまず理解することが重要だと考えられる。少し乱暴な考え方もかもしれないが、《継

起性》さえ理解しておけば、そうでない場合はシテイタを使っておけばよいというストラテジーもありえる。

《非継起性》の中には、《同時性》《後退性》《背景的同時性》が含まれるが、教育文法では、これらを厳密に区別する必要はないと考える。まず、《同時性》と《背景的同時性》には大きな違いはないと考えられる。(2)の「子供は寝ていた」と(4)の「遅く家に帰っていた」の違いは、前者が個別具体的な事柄(1回性)であるのに対し、後者が多回的抽象的な事柄(複数性)であるということであるが、広くとらえれば、両方とも文脈における背景的、状況的説明をしているのであり、ここを厳密に区別して教授する必要はないように考えられる。

次に、《後退性》であるが、これは一見、異質であるように感じられる。この異質性は、[パーフェクト性]というアスペクト的意味に由来する。[パーフェクト性]とは、「ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力を持っていること」である(工藤 *ibid.*: 99)。そして、そのタクシスの機能は、《同時性》ではなく、《一時的後退性》、つまり設定時点とのかかわり(効力)のある先行運動を導入することである(工藤 *ibid.*: 112)。例えば、(3)では、設定時点(帰宅時)よりも前に行った行為が設定時点に関係づけられている。それにより、「部屋が暖かかった」という帰宅時の状況説明として自然に解釈できる。これをシタにすると、解釈不可能とまではならないが、自然な解釈に支障をきたす。

(3)' ? 昨夜は 10 時ごろ家に帰った。部屋が暖かかった。実は、外出の前に暖房をつけたのだ。

(3)'では、3文目のシタ(「つけた」)により、設定時点とかかわりのないかたちで完全に時間を後退させてしまっているために、自然な解釈が難しくなっている。このように、シテイタは、文脈を一時的に後退させ、設定時点より前の事柄がその設定時点にまで効力を維持していることを示す。

しかし、「効力」が残存し、設定時点との接点を持つということであれば、広く考えて《同時性》と解釈してもよい。

つまり、(2)の例は個別具体的な運動との《同時性》を、(4)の例は多回的抽象的な事柄との《同時性》を、そして(3)の例は個別具体的な運動の効力との《同時性》を表すと理解することで、《継起性》と《同時性》という2つの大きな区別がわかりやすくなるのではないだろうか。

さらにここで、「出来事」と「状況」という用語について定義をしておきたい。「出来事」とは、その時間的長短に関わらず、〈過去〉のある時点で生じた事柄であり、一方、「状況」とは、「出来事」が生じた時の背景を説明するものと定義する。そして、それぞれシタ－シテイタが用いられるとする。ここまでの議論を表3にまとめる。

表3

厳密なタクシス	単純化したタクシス	用語	形式
継起性	継起性	出来事	シタ
同時性	非継起性＝同時性	状況	シテイタ
後退性			
背景的同时性			

以上を踏まえ、シタとシテイタの使い分けにおける最も基本的な考え方として、学習者に対する以下のような意識づけが必要であると考えられる。

- (5-1) 過去のあるまとまった内容について、複数の出来事が時間的に順番に起こったことを述べる時 → シタを連続して使う
- (5-2) 過去のあるまとまった内容について、複数の事柄が（時間的な順番は関係なく）同時に起こったことを述べる時、つまり、出来事が起きた状況を説明する時 → シタとシテイタを使う

日本語においては、シタ－シテイタという動詞の形態的な違いによってタクシスを表すことが義務的である。話し言葉であれ、書き言葉であれ、ま



ずは (5-1) (5-2) に留意しつつテキストの構成を理解することが重要だと考えられる。

このような基本的なタクシスを念頭においた場合、以下のような誤用の原因は容易に理解されるものと考えられる。

(6) この四か月に私はいろいろなことを見ました。たとえば古い日本の文学や歴史や文化などを知っていました。(『誤用例集』:62)

(6) の文脈では、「見た」→「知識を得た」という《継起性》を表現する文脈だと考えられるため、下線部にシタを使用すべきである。しかし、シテイタが使用されているため、「見た」時点での「知識の保有」という状況説明のような解釈になってしまう。これは、「知る」は通常、「知っている」の形式で導入されるため、それを並行的に〈過去〉に適應したために起きた誤用だと考えられる。このように、シテイタはシテイルの〈過去〉、または意味的な説明にとどまってしまうと、このような誤用を回避することは困難だと考えられる。参考までに、学習者による正用の例も挙げておく。

(7) C : あ、え、えーと、えー、うーん、1カ月前に、えーと先生と一緒に一、えー、こうがい、こうがい分かる？

J : どこですか。

C : えー、ここがい。うーん、えー、人、車が来ない、人が〈うん〉出ている街、ショッピングの街。

J : ああ。

C : ああ、そこへ先生と一緒に行きました。うーん、そこ、ほんとに、えーユニクロの人気を知りましたよ。

(『日中』 pair-02-10-0)

(7) の例では、シタの連続（「行きました」「知りました」）によって継起的に起きた出来事がよく表現されている。

## 5. タクシスの単純解釈における注意点

前章では、シターシテイタの文法説明について、(5-1) (5-2) の説明を基本的なものとするを提案した。しかしながら、これだけでは説明しにくい文法現象が存在するのも事実である。以下に留意すべきいくつかの点を見ていく。

### 5.1 単独的な事柄

厳密な意味での〈現在〉(発話時)という時間は瞬間的である。一方、〈過去〉および〈未来〉については、「さっき」でも「100年前」でも同じ〈過去〉であり、「まもなく」でも「100年後」でも同じ〈未来〉である。このように、〈過去〉と〈未来〉は広がりを持つ時間的概念であるため、そこで述べようとする内容には、複数の事柄の時間関係の明示が必要になる場合が多い。タクシスは、一つの出来事(あるいは状況)に関係する複数の事柄を描写しようとする場合に必要となる概念である。しかしながら、そういった「複数の事柄」という意識を特に持たない場合もある。特に、挨拶などの簡素な会話では、「きのう、〇〇っていう小説を読んだよ。おもしろかった。」という情報伝達のみで会話を終えることもあろう。そのような場合は、特にタクシスを意識することなく、シタを使えばよい。ここで無作為に「きのう、〇〇っていう小説を読んでいたよ。」とすると、誤用であるとは言い切れないが、何か未完成なテキストのように感じられる。シテイタの《同時性》というタクシスの機能により、その「読書」という状況において起こった出来事の説明を期待させる文脈になるからである。(8)におけるシテイタは、会話の冒頭において、学習者が発話した無作為なシテイタとも受け取れるが、実際にはそれほどの違和感を感じない。

- (8) C : えーと、あのね、うーん、昨日の夜、えっと、えーっと、日本の『浦島太郎』という、童話が読んでいました。で、ちょっと質問がありますけど。えっと、あの、浦島さん、あ、いえいえ。

浦島太郎という男は、えっと、亀さんに、えっと、竜、竜宮城に、え、連れ去れたですね。えっと、でも、彼は、帰ったとき、もう 100 年がたったのですね。

J：はい。

C：えっと、えっと、あの、えっと、浦島さんは亀さんを、助かったでしょ。  
(『日中』 pair07-05-0)

これは、後文の「ちょっと質問がありますけど」により、「童話を読んでいた」状況において、「ある疑問がわいた」という出来事が起こったという解釈が自然に想起できるためだと考えられる。このように、実際の言語使用を見てみれば、(8) のようなシテイタが現れるわけだが、まずは初級における教育文法においては、単独的な事柄に対しては単純にシタを用いて表現すればよいという指導が先決だろう。

ところで、日本語教材の早い課で扱われるのは、このような単独的な事柄を述べるためのシタである。「きのうは何をしましたか。」—「テニスをしました。」などの QA が主な練習となる。ただし、会話練習として、「それから」が導入され、「本を読みました。それから、ビデオを見ました。」のような練習に発展させる場合もある(『みんなの日本語 I』第6課)。これは、タクシスとして《継起性》を扱っていると言えるが、この段階では特にそのような明示的な説明を与える必要はないであろう。シテイタが導入される際に、シタとシテイタのどちらを使うべきか、使い分けの整理が必要になると思われるからである。

## 5.2 単純列挙

次に、複数の〈過去〉の出来事を述べる場合でも、時間的な順序を示す必要のない場合がある。

(9) 今日は曇りのち雨となりました。おおむね曇りでしたが午後半ば頃から雨が降ったり止んだりしました。今日の最高気温は二十三〜二

十四度ぐらいまで上がったものと思われます。 (BCCWJ)

(9) はシタを複数使用しているが、《継起性》を表そうとするものではない。このように、「動きの表現の列挙であっても、出来事をリストアップするような文脈で、同一時間上に位置づけない」(日本語記述文法研究会 2007: 19) 用法もある。この場合は、過去の複数の出来事を時間経過に沿って述べようとする意識はなく、単なる出来事の列挙である。このような用法も、シタの導入段階では明示的に説明する必要はないと考える。前述のように、使い分けの整理が必要なのはシテイタが提出された後だからである。

### 5.3 [反復性] のとらえ方

前章では、表 2 に示されたタクシスの機能を 2 つに単純化し、《継起性》はシタ、《非継起性 = 同時性》はシテイタで表すとした。しかしながら、ここで [反復性] の解釈について検討しておかなければならない。表 2 にもあるように、[反復性] はシテイタだけではなく、シタでも表される。実際に、(10) の例でも明らかのように、[反復性] はシタでもシテイタでも表される。

(10) (若いころは) いつも残業で遅く家に帰った／帰っていた。

したがって、複数の事柄のある文脈では、シタでもシテイタでも、《同時性》(工藤では《背景的同時性》) のタクシスの機能を持つ。

(11) 「兄さん、いらっしゃい」とお延は正太に挨拶した。従兄妹同志の間ではあるが日ごろ正太ことを「兄さん、兄さん」と呼んでいた。

(工藤 *ibid.*: 150)

(12) 「一番だって言ったって、浪人してるじゃないか」

瞬間、増田は小林に飛びかかって行った。兄の悪口を言われると、増田はいつも別人のようになって憤った。 (工藤 *ibid.*: 150)

(11)の「挨拶した」、(12)の「飛びかかって行った」というシタで表された出来事について、それぞれの状況を「呼んでいた」(シテイタ)、「憤った」(シタ)という別形式で説明している。このように、〔反復性〕はシタでもシテイタでも《同時性》=状況を表しえる。

ところで、〔反復性〕の扱いについては、初級日本語教科書によって違いはあるものの、概ね次のようである<sup>4)</sup>。まず、動詞の提出の際に、「毎日～スル」といった文型で習慣的行為が導入される。その後の課で、習慣的行為のシテイルが提出される。併せて、〈過去〉の習慣的行為としてシテイタが説明される。基本的には、スル(シタ)でもシテイル(シテイタ)でも、ともに〔反復性〕を表すという指導を行っていると言える。

本稿の立場では、シタもシテイタも〈過去〉の〔反復性〕を表すということは肯定しつつも、(5-2)における基本的な考え方を一般化し、シテイタは《同時性》=状況を述べるために使用するという説明ができるのではないかと考える。確かに(12)の例では、シタ(「憤った」)であっても、「飛びかかって行った」との《同時性》=状況を説明していると言える。しかし、様々な実例を見ていくと、状況の説明としてはシテイタのほうが適切だと考えられる例が見受けられる。

(13) ともあれミュウはすみれのパジャマを脱がせることにした。このままでは体が冷え切ってしまう。八月だったけれど、島の夜はときには肌寒いまでに涼しくなった。二人は毎日水着も着ずに泳いでいたし、お互いの裸体を目にするにも慣れていた。

(BCCWJ)

(14) 小学校4年生の時、荏原中延駅前にマクドナルドがオープンした。私は何日も前からオープンの日を心待ちにし、フライドポテトの無料引換券がボロボロになるほど、毎日持ち歩いていた。開店日の朝(…)

(BCCWJ)

(13)の波線部を含む文を単体で取り出せば、「二人は毎日水着も着ずに

泳いだ」でも「泳いでいた」でも、習慣的行為として、それほど違いを感じることはない。しかし、文脈の中で考えると、「脱がせることにした」という出来事との関係上、「泳いでいた」のほうがより状況説明として機能しているように感じられる。(14)においても、「持ち歩いた」にしてしまうと、習慣的行為としての解釈は維持されるものの、「オープンした」という出来事との関連性が希薄化するように感じられる。寺村 (*ibid.*: 129) は、スルが表す〔習慣〕と違い、シテイルの場合は、『『コノ頃』『最近』のように、限られた時間の幅を意味する語によって修飾されるのが自然』としているが、(13) (14) の例においても、ある出来事との《同時性》という、ある意味では限られた時間における習慣的行為を表そうとするものなので、シテイタのほうが自然な解釈を生み出すものと考えられる。

したがって、単体として習慣的行為を述べようとする場合にはシタ、他の出来事との関係で、その習慣的行為を状況として説明しようとする場合はシテイタを使うとし、(5-2) の一般化に沿った方法で文法指導ができるのではないかと考える。

#### 5.4 会話において運用が困難とされるシテイタ

谷口 (1998) は、シテイタの誤用例として、以下を挙げている。

(15) (Bが約束の時間に遅れて)

A : 遅かったですね。

B : ?すみません。友達の奥さんと話をしました。

(谷口 *ibid.*: 42)

これについて谷口 (*ibid.*: 42) は、「その動作 (話をする) 自体は過去のことなので、単純タ形 (シタ) で表したものと考えられるが、この場合も文脈上『(相手 A が私を待っている時に) 私は話をしていた』という動作の基準点が念頭に置かれるべき発話場面である」とし、「自然な日本語としては (…) シテイタで表すべき」だとしている。

(15)' A : 遅かったですね。

B : すみません。友達の奥さんと話をしていました。

(谷口 *ibid.*: 42)

この例についても、本稿で提案した (5-2) の説明での解釈は可能である。この「話をしていました」は、「A が私を待っている時」との《同時性》＝状況を説明するわけであるため、(5-2) との齟齬が生じるわけではないからである。ただし、谷口の説明にもあるように、基準となる時点が会話的文脈に依存して言語化されない場合には、やはりこのようなシテイタの産出は難しいであろう。また、この例に見られるようなシテイタの例は、会話において頻出するものであると思われる。このような例は、導入時に用いるのは不向きであると考えられる。したがって、《同時性》の概念が十分に理解された上で、会話に頻出するシテイル（シテイタ）の用例として取り上げるべきだろう。

その際の文法説明のあり方を考える。まず、谷口 (1997) は、シテイルについて「報告性」の機能を持つとしている。

(16) 「どう、調子は？」

- a. 「うん、毎朝ジョギングをしているよ。」
- b. \* 「うん、毎朝ジョギングをするよ。」

(15)' のシテイタ（「話をしていました」）においても確認できるように、確かにシテイル（シテイタ）は「報告性」を表している考えられるが、そもそも人間の言語活動自体、何らかの情報を報告することが主な目的と考えられるため、「報告」という用語はいくぶん曖昧に感じられる。日本語教育においては、もう一段階、その機能に具体性を持たせ、「謝り」「言い訳」等の場面での状況説明を表す用法として説明するのがよいのではなかろうか。

(17) は日本人の発話の例、(18) は日本語学習者の発話の例である。

- (17) J : あ、もしもし。  
C : えー聞こえますよ。  
J : 聞こえますか。  
C : ようやく来ました。えー今何か用事がありましたか。  
J : あ、ちょっと。すみません。あの、ちょっとだけその、友人  
と長話をしていたために。  
C : ああ。 (『日中』 pair02-6-4)

- (18) C : あー、Jさん、こんにちは。  
J : こんにちは。  
C : 昼ご飯食べましたか。  
J : はい。  
(…中略)  
C : あ、さっき授業から、うーん帰ってきて、●いたら、あ、急  
いですいません。  
J : いいえ。大丈夫です。あ、私はちょっと。  
(『日中』 pair02-08-0)

(17) (18) とともに、スカイプでの会話の冒頭部分に現れたやり取りである。(17) は、日本語母語話者の正用である。J が約束の時間に会話を開始できなかったことに対する謝りの場面であり、遅れてしまった状況の説明のためにシテイタを使用している。(18) は学習者の誤用例である。こちらでも会話の開始が遅れてしまったことに対する謝り場面である。遅れた事情としては「授業から帰って来たばかりで、急いでいて／急いでいましたので、すみません」と謝罪すべきであろうが、シテイタを使用していないために、不自然な発話になっている。

このようなシテイタについては、(5-2) の説明による《同時性》の意味が理解された上で、会話場面での「『謝り』『言い訳』の状況説明」といった具体的な機能として説明されるべきであろう。



## 6. おわりに

本稿では、定着が難しいとされるシテイタの文法説明について、タクシスの機能による文法説明の可能性を検討した。まず、先行研究において示されたタクシスの機能を、教育文法の観点から《継起性》＝出来事と《同時性》＝状況とに単純化し、説明レベルの記述として、複数の出来事が時間的に順番に起こったことを述べる時にはシタを連続して使う、複数の事柄が（時間的な順番は関係なく）同時に起こったことを述べる時にはシタとシテイタを使い分ける、という文法説明を提案した。さらに、その一般化した文法説明では理解しにくいと考えられる言語現象についても検討した。単独的な事柄についてはシタの使用が適当であること、複数の事柄を単純に列挙する場合があります、それはシタで表されること、意味の違いがないとされる〔反復性〕のシターシテイタであっても、シテイタは出来事の状況を表すために積極的に使用される形式であること、そして、会話で現れる基準時点（出来事時点）が曖昧なシテイタの使用について、「謝り」「言い訳」の状況説明としてシテイタの指導を行うことを提案した。

テンス、アスペクト、タクシスに関する先行研究には膨大な蓄積がある。しかしながら、タクシスの概念をどう文法教育に生かすかといった研究は行われてこなかったように考えられる。本稿は、従来、積極的に扱われることのなかったタクシスの概念を、初級文法レベルの説明に応用することを目指したものであるが、(5-1) (5-2) で一般化した説明が学習者にとってわかりやすいどうかの検証、および、(5-1) (5-2) に対して第5章で論じた注意点については、十分であるとは言えないと考えられる。それは今後の課題としたい。

### 注

- 1) 許 (2005)、市川 (2010)、江田 (2013) を参照。
- 2) 一般的にテンスとは、発話時を基準として、その事象が〈過去〉〈現在〉〈未来〉のどこに生じたのかを表す文法カテゴリーである。ただし、日本語では、そのような発話時を基準とする「絶対テンス」もあれば、主節の時間を基準

として、その前後関係を表す「相対テンス」もある。タクシスについても、一つの事象を基準として、もう一方の事象がどういう時間的關係にあるのかを表すものである。そのような考えから、本稿では、シテイル（シテイタ）もテンスとして扱うという立場に立つ。ただし、スル（シタ）－シテイル（シテイタ）は、テンスなのかアスペクトなのかという排他的な概念ではなく、テンスとアスペクトを含みこんだ、動詞の最も基本的な形態である。よって、本稿は、シテイル（シテイタ）がアスペクト的意味を持たないと主張するわけではなく、教育文法の立場から、テンスおよびタクシスの観点からの説明の有効性を主張するものである。ちなみに、例えばスペイン語のように、動詞の過去形の形態に2種類が存在する言語でも同種の議論がある。つまり、点過去形と線過去形の説明において、アスペクト的意味（事象の内部的な時間）を中心に説明しようとする立場と（Gómez Torrego 1997）、テンスの意味（他の事象との時間関係）を中心に説明しようとする立場がある（Gutiérrez Araus 2012）。

- 3) 表1に現れる用語について説明を加える。畠 (*ibid.*) では、状態動詞と対立し、動きを表す動詞述部（工藤 *ibid.* における外的運動動詞）のこを变化動詞と呼称している。これに、心理作用や感情を表す動詞述部（工藤 *ibid.* における内的情態動詞）を含めることはできない。なぜなら、内的情態動詞におけるスルは、基本的には一人称で用いられるという人称制限があり、スルとシテイルの対立を、純粹に時間的關係を表すと説明することができないからである。したがって、本稿で提案する (5-1) (5-2) がカバーする範囲としては、内的情態動詞を除外せざるを得ない。また、ここでの超事態とは、習慣、真理、一般的な事実を指す。これらは、未来、現在、過去の時間的概念とは直接的な関係を持たない。なお、清水 (*ibid.*) では、〈過去〉にシタとシテイルの2形式を認めるのであれば、〈未来〉も2形式とするべきだとし、〈未来〉でのスル－シテイルの対立も認めるべきだと主張している。筆者は、本稿で検討するシタ－シテイタとの議論が〈未来〉のスル－シテイルの捉え方に並行的に適用できると考えているが、その検討は別稿にゆずる。
- 4) 『みんなの日本語』では第4課で動詞が導入される。『初級日本語』では第3課で動詞が導入される。いずれも「毎日」といった単語とともに、スルが習慣的行為を表すことを学習する。次に、『みんなの日本語』では第28課で、『初級日本語』では第15課で習慣的行為を表すシテイルが導入される。『みんなの日本語』では翻訳・文法解説の中で、シテイタが過去の習慣的行為を表すことが説明される。

## 参考文献

- 江田すみれ (2013) 『「ている」「ていた」「ていない」のAspect—異なるジャンルテキストにおける使用状況とその用法』くろしお出版
- 市川保子 (2010) 『日本語誤用辞典』スリーエーネットワーク
- 許夏珮 (2005) 『日本語学習者によるAspectの習得』くろしお出版
- 工藤真由美 (1995) 『Aspect・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 国立国語研究所 『現代日本語書き言葉均衡コーパス (中納言)』
- 清水淳 (2017) 「教育文法から見たシテイル (シテイタ) — 島 (2002) に基づいて—」『亜細亜大学学術文化紀要』第31号、pp.45-53、亜細亜総合学術文化学会
- 『初級日本語 (新装改訂版) 上』(2010) 東京外国語大学日本語教育センター、凡人社
- 『初級日本語 (新装改訂版) 下』(2010) 東京外国語大学日本語教育センター、凡人社
- 対照研究方法論開発班 (1980) 『日本語教育教材 (母国語別) シリーズ2 外国人の日本語作文に見られる誤用例集』大阪外国語大学
- 谷口秀治 (1997) 「テイル形の3つの性質 (客観性、現象描写性、報告性) について—ル形との対比から—」『広島大学留学生センター紀要 (7)』pp.40-48、広島大学留学生センター
- (1998) 「外国人に難しいスルとシテイルの使い分け」『広島大学留学生センター紀要 (8)』pp.41-49、広島大学留学生センター
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (2007) 『現代日本語文法3』くろしお出版
- 中俣尚己 (2015) 『日中 Skype 会話コーパス』、<http://nakamata.info/database.html>
- 島弘己 (2002) 「外国人のための日本語文法研究 (1) —テンスとしてのシテイイル—」『千葉大学留学生センター紀要』第8号、pp.49-74
- 『みんなの日本語初級第2版Ⅰ』(2012) スリーエーネットワーク
- 『みんなの日本語初級第2版Ⅱ』(2013) スリーエーネットワーク
- 『みんなの日本語初級第2版Ⅱ 翻訳・文法解説英語版』(2013) スリーエーネットワーク
- Gómez Torrego, Loenardo (1997) *Gramática didáctica del español*, SM
- Gutiérrez Araus, M.L. (2012) *Problemas fundamentales de la gramática del español como 2/L cuarta edición*, ARCO/LIBROS, S.L.